



日本ザル幼児の

保育ノートから

浅見千鶴子



バスケットの中

はじめに

私は日本ザル幼児の保育研究を始めて十年近くなる。毎年一頭か二頭の赤ん坊ザルを日本モンキーセンターその他から購入したり、貸与されたりして、彼らの母親代りとなって保育するのである。私の育てあげたサルたちを数えてみると十四、五頭にもなる。その中には事故でかわいそうなことに死んでしまったものも四、五頭あるが、元気に育っておとなになり、いいお母さんやお父さんになったものもある。これらのことどもについてはまたいつか語ってみたいが、ここではサルの赤ん坊の成長のすがたをたどってみることにする。

私の仕事は、いわゆる隔離飼育の一種であるが、隔離そのものの影響をみるのが目的ではなく、生まれて間もない赤ん坊がどのようにして「母親」を見いだしていくか、自分を保護し、養ってくれるものを確保していくことができるか、その過程のすがたや、メカニズムを見いだすこと、すなわち愛着行動(attachment behavior)と呼ばれる、幼い子どもに共通に現われる「親」なるものに対する反応行動の発達を研究するのが主な目的なのである。また、成長の

中に展開する仲間関係を追跡し、パーソナリティー形成の基本的なメカニズムも追究しようとした。この点に関してもいつか述べて見たいと思っている。

成長

生まれたてのサルの赤ん坊は、約四〇〇グラム位の大きさで、両手の中に入ってしまうくらいのかわいらしさである。眼が大きく、鼻も口も小さく、アゴが短くて逆おむすび型の顔をしている。最初は歯は生えていないが、生後四日ごろから下の前歯から生え出して、二カ月もすれば乳歯の全部が生え揃ってしまいうくらい速い。体は全体にうぶ毛につつまれている。うぶ毛はおおきくなってからの体毛の色とはちがつて、内地系では灰白色、ヤク島系のは真黒なやわらかい毛をしていて、すぐに見分けがつく、これが二、三カ月ごろから次第に生え代ってきて、半年もすると茶かっ色のややかたく長い毛になってしまう。

生まれた当座は、四肢はまだ弱くてふつうに歩けないが、物をしっかりと握りしめることができる。何かにしがみついていると不安らしく、ひとりで放っておかれると、手足をバタバタさせてもがいて泣き叫ぶが、何か触れるとそ

れにしっかりと抱きついてしずまる。自然状態では生まれるとすぐに母親のお腹によじのぼって胸毛にしっかりとしがみついている。母親から無理に放すと、手足をバタバタさせて泣き叫ぶ。それでタオルなどをあてがってやるとやっとそれを握りしめ、安心して静かになるのである。赤ん坊の手は小さくて指にはうすい平爪がある。私が手をさしのべてやると抱きついてくるが、その握る力が強く、うすい爪がきつく腕の肌に食いこむので、傷だらけとなるのが常であつた。

母親の胸に抱きついている赤ん坊は、顔を左右に動かして、乳首をさがし、口にふれるとそれに吸いついて乳をのみむが、人工飼育の場合は哺乳ビンでミルクを与えなければならぬ。日本で最初にサルの赤ん坊の哺育をされた故川辺寿美子さんの苦心談によると、乳のみ人形用のオモチャの哺乳ビンの小さな乳首を見つけて、それを使つたということであるが、私の経験では人間の赤ちゃん用の普通の哺乳ビンの乳首で十分間に合った。体の大きさは人間の赤ちゃんと同様で大へん違ふけれども、サルの口の構造がちがうのであろうか、けっこう大きな乳首でも入れてよく吸うことができるのである。



ミルクのみ

空腹になると赤ん坊は顔を左右に振って、しきりにさかすような格好をはじめ。そこへ乳首を近づけてやると、それが口に触れるとすぐに吸いついて飲み出す。だいたい飲んでいるうちにトロンとした眼つきになり、眼を半ば閉じたまま飲みつづける。やがて満腹すると、乳首をはなして眠ってしまう。よく眠くなりかけると乳首をさがすように顔を左右に振り始める。乳首をあてがうと眠りながらミルクをよく飲んだ。一日の哺乳量ははじめ一〇〇ccぐらいから日に日に増していき、一カ月で一五〇cc、二カ月で二〇〇ccと目ざましく増え、体重も日ましに増加していった。

サル成長速度は人間の約四倍だといわれる。一カ月もすれば足もすっかりできてピョンピョンカエルとびのよきな歩き方でどこへでもいくようになる。棒や金網をよじのぼる動きは歩くよりも早くから現われる。どんどん高いところまで上るが、降りることはまだできず、よく助けを求めて泣き叫んだりしていた。

愛着行動

最初の二カ月ばかりの間は誰にでも抱かれ、誰からでもよくミルクを飲んだ。私は最初のうちはミルクを三、四時間おきには与えなければならぬので、竹バスケットの中にタオルを入れて、その中に赤ん坊を入れて外出するときは連れて歩いた。大学へも毎日そうして通勤した。電車の中へも持ち込み、時には信州の山小屋へ行くために中央線の特急アズサ号に乗せていったこともある。哺乳の時間で、バスケットから出して、用意してきたミルクを飲ませていけると、まわりの乗客たちが珍しがって、近づいて愛撫してくれたりしたものである。このように、はじめのしばらくの間は、私からでも他の学生からでも平気でミルクを飲み、抱かれたり愛撫されたりして研究室のペットになっていた。

人見知り

そのように誰にでも遊んでもらっていたのに、三カ月ごろからようすが変わってくる。いわゆる「人見知り」が始まってくるのである。私以外の人が近づくと、恐ろしそうに鼻にしわをよせ歯をむき出し、恐れ表情をして「キッキッ」という恐れの声を出して泣き出す。ミルクも私以外の者が哺乳ビンをあてがっても飲もうとしなくなる。そして私のあとばかり追い出す。そばでひとりで遊んでいても、私が動きそうな気配がするとすぐとんできて抱きつく。ど



散歩

こへでもついてきて離れようとしないう。無理に放すと大きくわきして抵抗し、泣きわめく。このころからバスケットやケースの中に入れるのをひどくいやがるようになった。ケージの中に入れておくと、私の方ばかり眼で追っている。私の方へいこうとすると金切り声をあげて泣き叫ぶ。戻ってくるとビタリと泣きやむ。

「先生がいるときといないときとは全然ちがう」と学生たちが慨嘆していた。私自身にはわからないのだが、他の人たちにはサルのようなちがいがよくわかるらしい。私でないときも日も明けないというような一時期がある。

探索

見知らない場所に連れていくと、私にしっかりと抱きついていまま離れない。しだいに馴れてくると、少しずつ動き出す。抱きついていた手も放し、あたりのものをいじり出す。はじめはまわりだけを手のぼして探索しているが、だんだん遠いものもいたずらしくなってくる。はじめは後足の片方だけで私の服の端をつかんで体全体前へのぼしてあたりをいたずらしているが、少し遠いものをいじろうとしても、足が私から離れるとまたあわてて私のところに



山荘で遊ぶ

走り帰って抱きつくのである。こんなことを繰返しながらしだいに私から離れて、見える範囲で遠いところまで出かけて遊ぶようになり、私以外の人にも好意を示して近いうとするようになってくる。

好奇心

サルは一面保守的といわれ、食べ物など新しい見馴れないものが与えられると、こわそうにつまんで、ちょっとにおいをかいでみるふうをしてポイと捨ててしまうことが多い。しかし、よく馴れた場所では、目新しいものが目に入

るといちはやくそれを拾い上げ、かいでみたり、口に入れたり出したり、かんでみたり、しゃぶったり、一通りの検査をしていじりまわす。薄い紙などはたちまちに破かれ、口に入れられクチャクチャにかみつぶされる。小さな粒のようなものが大好きで、床の上に落ちていると目ざとく見つけてすぐつまんで口に入れてしまう。画びょうのような尖ったものもかまわず口に入れて楽しむ。ときにはほお袋の中に大事にしまいこんで、外からポコッと物の形通りにふくらんでいるのがわかる。ときどき口から出して眺めて、また口にはおぼる。気に入ったものは大分長い間口に入れたり、手にもったりしているが、他においしいものをもらわなければなくなると、もうそれをポロッと口から落として、新しい方に気を乗りかえてしまうのである。私たちが鉛筆やボールペンをとり出すと、こんどはそれがほしくなると、手によじのぼってとろうとしたり、追いかけてわして大騒ぎをする。ひもなどを結ぼうとしているとき、サルの目にとまると大へんである。そのひもの端をさっそうく手や口で引張りまわし目茶々々にされてしまう。何か食べようとするととんできてのぞきこみ口を近づけてはしがる。

夏の夜、蚊とり線香の煙が立ち上るのを見て、それをつかもうと手をのばして宙を一生懸命つかんでいた。また、きれいな花模様が画かれている絵を見て、それをつまもうと指を平らな面の上で滑らせて、苦心していたこともある。服のボタンが好きで、抱くと胸のボタンに吸いついたり、手でいじくったりする。眼と手と口の協応動作はかなりすぐれているようである。

グルーミング

自然の母と子であると、母親ザルは子どもを抱いていて、暇さえあれば、子どもの体をグルーミングしている。両方の手を巧みに動かして、子どもの頭や顔や体のあらゆる場所の毛をすき分けて、何かについていると指でつまんで口に入れる。口をモグモグさせながら、しきりに子どもをグルーミングしてやっている光景はほほえましい。子どもは母親のなすがままになって仰向けになったり、片方の腕をあげてじっとしてグルーミングを受けている。グルーミングは、されるのもしてやるのも一種のたのしみのようなものになっているらしい。はじめは赤ん坊は一方的に母親にされるだけであるが、半年ぐらいうると少しずつ自分の方から相

手にしかけるようになる。はじめはほんのお印ばかりで、すぐに他の活動に移ってしまいが、しだいに念入りに長い時間をかけてやるようになる。そのうち自分の体も自分でグルーミングするようになる。グルーミングを覚えると、誰かにしてやりたくてたまらなくなるらしい。私のサルたちは私の手をつかんで、毛がない裸の指を、しきりに口をモグモグさせながらグルーミングの手つきをした。手をパタパタとして毛を分ける格好をし、小さなホクロのようなものを見つけると、それをつみとろうとする。指でとれなければ口をつけて舌でなめとろうとする。そのうちにいつの間にか私の指から、自分の毛の生えている腕に毛分けが移って、またあわてて私の指をつかむのである。二頭を対にして育てているときは、かなり早くからお互いにグルーミングする姿がみられた。ひとりがグルーミングをしてやりたくなくて相手をつかまえると、その相手はまだ自分にしてもらいたくないというとき、すりぬけて逃げ出す。そうするとやりたい方は怒ってギャギャツとわめく。よく二匹でグルーミングをめぐるイサカイをやっていた。一方がやってもらうと、こんどは入れ代ってやる側になり、交互にやり合うことが発達する。

グルーミングは自然の毛皮の清掃手段であるが、人間の私はうまくサルや赤ん坊にしてやれない。その代りにお風呂をお湯をつかわせた。少し大きめのおけやバケツにお湯を一杯いれて、その中に赤ん坊を抱いてつけてやる。何をされるか不安そうに、はじめは私の手にしがみついているが、お湯はあたたかくて気持ちがいらいしくおとなしくなっている。石けんをつけて一通り洗って流してやる。ここまでではいいのだが、お湯から上げて水をふいてやる段になると大へんである。タオルで体をこすられるのが恐いのか必死になってもがき、逃げ出そうとする。ぬれた毛皮は水をたくさん含んでいるので私も水でビショリ服をぬられながら、タオルをもってサルを追いまわす。格闘の末やっと水気をふき上げるときれいになった毛がフックラとすがすがしい赤ん坊になる。その後しばらくの間彼らは私を警戒してよりつかない。ひどい目に合わされたと思うのであろう。

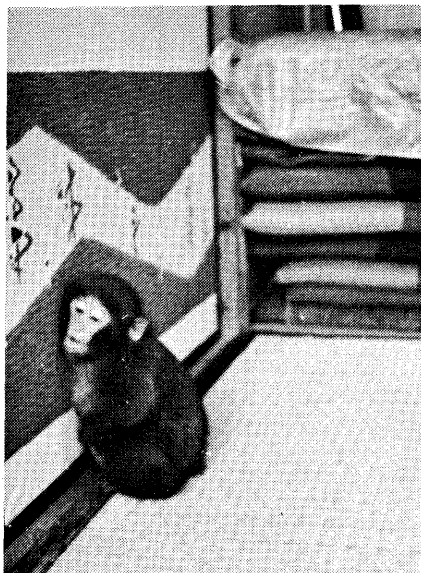
すね行動

何か気に入らないとき、たとえば体を押えつけられ自由がとれないときなど、体をピクピクとバネ仕掛の人形のよ

うにけいれんさせる。そしてときにはガブッと手にかみついたりする。このような反応は生後間もないころからよく現われた。怒りの反応の一種であらう。しだいにこれが少なくなってくると、次に「すね行動」がでてくる。これは自分の思うようにならないとき、たとえば抱きつきたいのに、抱いてもらえないといううなとき、突然、ギャーッと大声で泣き出して、あたりを暴走し、部屋のすみなどに走っていつてうずくまって泣きわめく。こちらがおどろいてなだめたり、すかしたりしても、後ろをむいたきり動こうとしない。そしてチラ、チラとこちらを見てはまたそばをむいて泣き声をあげる。私もきげんをとるのをやめて知らん顔をしてはかへ行くふりをする、急にとんできて胸にとびこんで顔をうずめてシャクリ上げるようにして泣く、そして一しきり泣いてしまうとあとはまたケロリとして、いたずらをはじめてとびまわるのである。このすね行動はその後頻発し、ほしいものがなかなかもらえないとき、すぐギャーッと泣きわめいて手に入れることを覚えた。もらってしまうとケロツとしている。つまり手に入れる手段としておどかし泣きを始めたのである。四、五ヵ月になるとあまり泣かなくなる代りに、おどしの身振りや音声をす



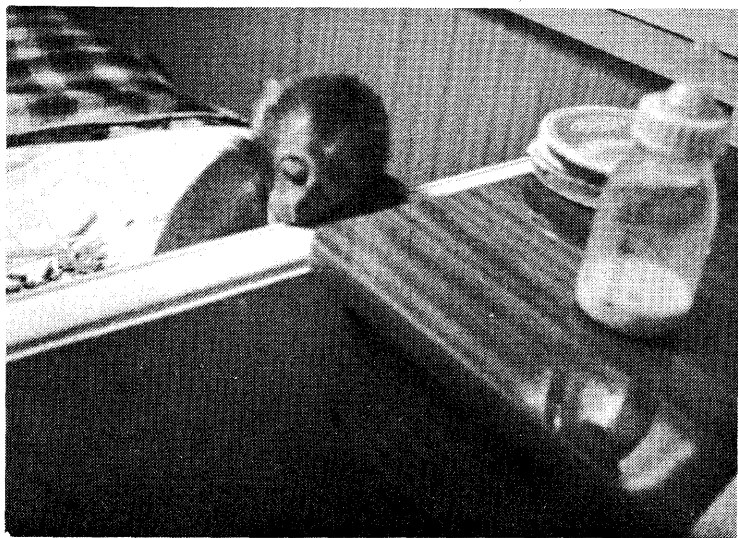
るようになった。じつとこちらをにらんで口をあける。いまにもとびかかるようなふりをする。しっぱをピンとあげて向かってくる。気の弱い学生が小さな幼児のサルにこんな格好でおどかされて、逃げまわった。



すね行動

書いていろいろなことが出てきてきりがない。サルは泣き声をあげるだけで、ヒトのようにコトバをいえないが、情緒や感情などはよく通じ合う。よろこびの声や悲しみの声はすぐ私にもききわけられる。しばらくぶりに会うと抱きついて離れない彼らに、親に似たよろこびを感じ

いねむり



るのは私の醍醐味だいごであろうか。

(お茶の水女子大学)